

早春賦

大森 海太

春は名のみ風の寒さや 谷のうぐいす歌は思えど・・・

イヤ、今年の二月は寒かった。ことに日本海側では記録的な豪雪に見舞われ、屋根の雪おろしなどで多くの災害が発生。幸い東京では雪はなかったが、地球温暖化はどーなっちゃったんだ、と言いたくなるような寒さだった。

でも寒い寒いと言っても陽の光が違う。以前にも書いたが、十二月は日暮れが早くなって日ざしが弱々しく、この世の終わりを思わせて気が滅入る。

ところが二月に入ると日が長くなり、あたりに早春の輝きがあらわれてくる。

さらに気がつくと昨日まで葉がなかった枝に、いつの間にか花が咲き始める。

それは梅の花。風は冷たいがまぶしい二月の日光の下、可愛い花を咲かせている。春の始まりだ。

二月中頃のある日、昔の会社の上司、仲間六人と恒例の「下町会」。今回はお茶の水から東京都水道歴史館を見学したあと、近くの神田明神まで歩いた。

本殿にお参りしたあと時間があつたので裏手にまわると、小さな御社おみしゃがいくつかあつて、そのわきの見事な白梅が満開だ。となりには小ぶりの紅梅も咲きかかっている。

この季節にここまで来たのは初めてだったが、こんなところで早春の小世界に出会えるとは思わなかった。

そのあとは大鳥居の近くの蕎麦屋でうちあげ。ソバを肴に昼酒で梅談議に花が咲いた。そうだ、少し歩けば白梅で名高い湯島天神もあるし、帰りに寄ってみるか、などという話も出たが、酒が進むうちにいつのまにか立ち消えになった。

願はくは花の下にて春死なむ その如月の望月のころ

これは私の祖母が晩年よく口ずさんでいた西行の歌である。

旧暦の如月は今の二月下旬～四月上旬にあたるというから、必ずしも梅の花とはかぎらず、椿、ロウバイ、ボケ等々、桜に至るまで多くの花々のことかもしれない。

どちらにしても冬を終えて春を迎える好い季節。そんな中で一生を終えたいとの思いを詠んだのだろう。

祖母はその希望通り四十年前の二月、九十三年の天寿を全うした。